

Company & Key person



太 陽光パネルの中間処理に関する新法が2026年5月29日に成立した。メーカーは市場への影響をどう見ているのか。中間処理装置製造のエヌ・ピー・シーを率いる伊藤社長に聞いた。



「再資源化の出口づくり」に力を注いでいく

エヌ・ピー・シー 伊藤雅文 社長

—— 太陽光パネル中間処理の新法成立をどう見る？

廃棄パネルを多く排出する事業者から段階的に再資源化の計画策定を義務付けることとなり、業界全体の意識向上に繋がるように思う。ただ中小規模の太陽光発電所オーナーの属性は様々で、彼らに対してどう対応していくかは課題だ。とはいえ、廃棄パネルの中間処理が法制度として整備されたことは追い風だ。実際、2026年6月に不動産会社の穴吹興産がパネル

中間処理業に参入し、当社製品を採用する方向だ。当社の松山工場への視察も増えており、関心が高まっているように思う。

—— 装置の納入実績は。

25年11月に施行された『再資源化事業等高度化法』による産業廃棄物処分の規制緩和を背景に、当社装置で認定取得を目指す事業者も出てきており、装置の販売は伸びている。当社の主力製品は、ジャンクションボックスとアル

ミフレームを分離する『ディフレーター』と、加熱した刃でガラスを割ることなくガラスとセルを分離する『ホットナイフ』、さらにセルシート分離後にガラスを割ることなく処理する『EVAスクレーパー』だ。

予定分を含めると国内出荷が43台で、海外を含めると合計57台の納入実績となる。

—— 製品開発の方向性は。

26年4月には新製品、割れガラス分離装置の受注を開始した。従来はガラスが

割れたパネルは処理対象外だったが、割れガラスへの対応を求める声が多く寄せられていたため、予定を前倒しして受注体制を整えた。26年秋にも納入する見通いだ。その一方で、当社は破碎方式を採用しつつも騒音を抑え、省スペース化を実現した。これで4種類の製品が揃い完成形に近づいた。ただ、大量廃棄時代を見据えれば、処理性能の向上や、新たな処理方式の開発が必要になるだろう。あらゆる可能性を検討していきたい。

—— いつ中間処理業に参入した？

19年7月に廃棄物処分の許可を取得し、中間処理業に参入した。狙いは、当社自社装置を実際の現場で運用し、性能向上に繋げることにあった。装置メーカーとして「自ら使い、改善する」という姿勢を大切にしていく。今後も事業の軸は装置開発だ

装置納入実績（2026年6月までの台数・納入予定含む）

	日本	フランス	チェコ	オーストラリア	アメリカ	台湾	合計
ディフレーター	23	4	1	1	3	1	33
ホットナイフ	14	1	1	1		1	18
EVAスクレーパー	5						5
割れガラス分離装置	1						1
合計	43	5	2	2	3	2	57

※NPC資料よりPVeye作成

が、やがて四国でも大量廃棄の時代が到来する。その際は事業者として中間処理業を担いながら、装置開発との両軸で事業を展開していく。

—— 太陽光パネル中間処理業における今後の戦略は。再資源化事業の出口づくりに力を注いできた。25年9月に販売開始した『EVAスクレーパー』には、ガラス表面に残存するEVAを高精度に除去し、ガラスの純度を高められるという特徴がある。この技術により、AGCやセントラル硝子とリサイクルガラスを供給する体制を構築した。

現在、中間処理装置の売上高は総売上高の1割未満だが、中間処理業の比率を段階的に高め、既存の装置販売とバランスの取れた収益構造にしたい。